

埼玉女子短期大学研究紀要 第6号 1995.03

日本語文章の「レトリック」と 英語文章の“R h e t o r i c”に関する一考察 —— 理由提示型文章（“Explanation”と“Argument”）の場合 ——

A Contrastive Study of Japanese and English Rhetoric:

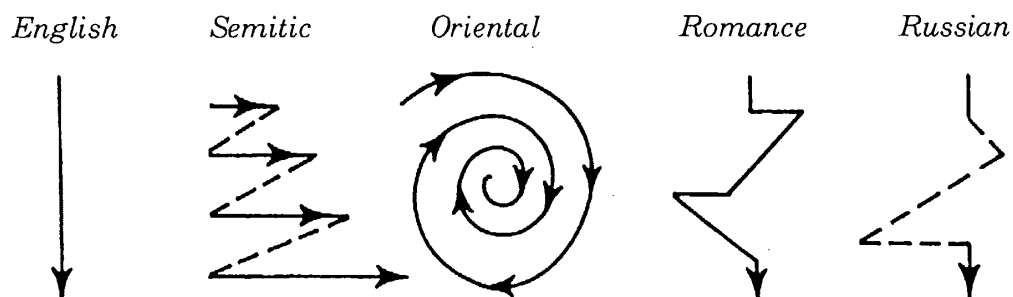
Explanation and Argument

林 田 弘 美
Hiromi Hayashida

This paper explores the marked differences between rhetorical practices of Japanese and Americans, which the socio-cultural features peculiar to each may have contributed. “Consensus” seeking Japanese favor “explanation” type-discourse, while “persuasion” seeking Americans favor “argument” type-discourse. *Toiunowa*, a reason-introducing Japanese connective, is mostly used in “explanation”.

0. はじめに

アメリカに留学している各国学生の英語作文を比較観察・検証したR.Kaplan(1966)は、文章展開の型が言語によって異なることを指摘し、その違いを下記の図によって直観的に表した。



この図が示すように、英語は“a sequence that is dominantly linear in its development”(p.4)であるのに対し、東洋語は“turning and turning in a widening gyre”(p.10)であるという。言い換えると、直線的な英語は、各段落の初め若しくは終わりにその段落のトピックを述べ、後はトピックに直接関係ある説明のみを補うのである。一方螺旋状の東洋語は、トピックに直接的に言及することなく、その周辺をぐるぐるまわっているという。この図のような英語と日本語の談話構造の違いは、今までそれを意識していなかった多くの日本語母国語話者にとってもなにかしら思い当たるところなきにしもあらずであろう。英語学習歴が長い日本語母国語話者ほど、直線的な英語とそうでない日本語の違いに強く納得するのではないだろうか。ただ皮肉なことに、上記のKaplanの図のOrientalには、実は日本語は含まれていないのである。彼の対象とする東洋語は中国語と朝鮮語の二つであった。

いずれにせよ、言語による談話構造の違いを研究する対照レトリックの分野は、Kaplanの先駆的研究により脚光を浴びるようになったが、先の論文で彼が何故か対象外とした日本語を英語と対照させた日英対照レトリックの研究が近年盛んになりつつある。主なものではHinds(1976), Nishimura(1986), Oi(1986), Oi & Sato(1990), 西光(1990), 佐藤(1990)等が挙げられよう。

筆者も別稿(1994a,1994b)にて、接続詞の使い方の観点から日本語と英語の文章展開の違いを論じてみた。直線型の英語に対し、一歩先に進んでは半歩後に戻る論のすすめかたをとることの多い日本語談話構造の特色を、「補足」の接続詞モットモの用法から明らかにしようとしたのである。本稿では、それらも踏まえた上で、さらなる日本語談話構造の特色を考察してみたい。即ち日本語と英語のレトリックの考え方には根本的な相違があると思われるがそれは何に原因があるのか、またそれが特定の単語(日本語接続詞トイウノハ)の用法にどのように反映されているか、を考察してみる。

1.1. 日本語の「レトリック」と英語のRhetoricの概念の違い

「レトリック」を『広辞苑 第四版』で調べると、「修辞法。修辞学」と記されているのみである。さらに「修辞法」「修辞学」「修辞」を調べると、それぞれ下記のような説明が記載されている。

- (1) 「修辞法」 修辞に関する法則または手法。

「修辞学」 読者に感動を与えるように最も有効に表現する方法を研究する学問。

アリストテレスの「修辞学」（弁論術）に始まるという。

「修辞」 1 ことばを有効適切に用い、もしくは修飾的な語句を巧みに用いて、
表現すること。またその技術。

2 ことばを飾り立てること。また、ことばの上だけでいうこと。

一方、Rhetoric の定義は、*Webster's Third New International Dictionary (Unabridged)* によれば、次の通りである。

- (2) the art of expressive speech or discourse; specif: a: the study of principles and rules of composition formulated by ancient critics(as Aristotle and Quintilian) and interpreted by classical scholars for application to discourse in the vernacular b: the art or practice of writing or speaking as means of communication or persuasion often with special concern for literary effect

簡潔な説明が義務づけられる辞書の定義だけでは、果たして「レトリック」とRhetoricに違いが有るのかどうか分かりづらいが、それでもこの辞書の定義の比較から一つだけはっきりすることがある。それは、Rhetoricには“persuasion”が意図されているということである。それに対して「レトリック」には“persuasion”に相当する語句がなく、代わりに「感動」の言葉が含まれている。「感動」すれば結果的には“persuasion”の効果を生じることになるかもしれないが、それでも“persuasion”と「感動」には大きな隔りがある。なぜなら、“persuasion”は本来理性的な次元の事柄であるのに対し、日本語の「感動」は普通、感情・情緒の次元の事柄だからである。

Rhetoricのもつ“persuasion”の性格について、R.Okabe(G.D.Claiborn著*Japanese and American Rhetoric*からの引用)は次のように説明する。

- (3) Rhetoric, in the Western sense of the word, is concerned with persuasion pursued at public forums. The prototype of the American speaker consciously uses symbols to create an understanding and to form, strengthen, or change an attitude on the part of his or her listeners.

American rhetoric, in this sense, is basically argumentative and logical in nature. It is also confrontational in that the speaker as an independent agent always stands face to face with the listener as another independent. Confrontation carries a positive connotation in American rhetoric: It is seen as a dynamic force for the advancement of Western civilization. (p.37)

Rhetoricとは、話者（又は書き手）が聴者（又は読み手）に言葉でもって働きかけ、説得して自分の考えに同調させるためのものである。そしてその底に流れるのは話者と聴者、個人と個人は対立する存在であるという考えである。対立する関係であるが故に、説得する・説得される必要が生じるのである。言葉はそのための武器となる。いかに効果的にその武器を使うか、それがRhetoricである。

続けてOkabeは、対比的に日本語「レトリック」について述べる。

- (4) The Japanese, on the other hand, value harmony and view harmony - establishing and/or harmony - maintaining as a dominant function of communication. They seek to achieve harmony by a subtle process of mutual understanding, almost by intuition, avoiding any sharp analysis of conflicting views. The result is that Japanese rhetoric functions as means of disseminating information or of seeking consensus. It is by nature intuitive, emotional, and adaptive. (p.37)

対立が根本にある欧米と異なり、個人と個人の間を調和・融和する人間関係として捉える日本社会では、言葉は説得を意図する武器とならず、むしろより一層の理解・調和をはかるための手段となる。いかに理解を高めるか、それが「レトリック」である。

Okabeの表現からキーワードを借りれば、西欧のRhetoricが“persuasion”を目的とするのに対し、日本語の「レトリック」は“consensus”を意図するものといえる。そのためRhetoricが、“confrontational” “argumentative” “logical” な性質をもつのに対し、「レトリック」は“intuitive” “emotional” “adaptive” な特徴をもつこととなる。当然、Rhetoricが日本語の世界で根付くことはなかったし、現在も一般的とはいえない。これは多くの日本語母国語話者が納得する見方であろうし、G.D.Claiborne (1994)も同

様の見解を示している。

- (5) ...there exists no tradition in Japan of the theory or disciplined practice of rhetoric in any manner akin to that which has prevailed in the Western intellectual tradition. (p.35)

Rhetoricと実態の大きく異なる「レトリック」、このような日本的コミュニケーションの在り方が生じたのは何故か、その背景を次に考察してみたい。

1.2. 日本語の「レトリック」を生み出した風土

もともと日本語の世界が言語によるコミュニケーションに重きを置かない風土であることは、多くの諺によっても証明される。「沈黙は金、雄弁は銀」「あうんの呼吸」「以心伝心」等は、明晰なる言語表現・伝達が必ずしも歓迎されない風土であることを物語るものである。それは、たとえば「あうんの呼吸」が象徴するように、言葉でもって表現しなくとも分かりあえる社会だからである。島国の村社会、しかも同質の村社会であれば、日々の暮らしで共有する部分が余りにも多く、言葉以前にお互いに分かりあってしまう・感じあってしまう現実がある。それは同時に、分かりあえない・感じあえない部分は表面に出してはいけない同質村社会の掟をも意味する。個人は対立する存在ではなく、集団の共通の利害関係の中に協力しあいながら生きる集団である。このような風土にあっては、“confrontation”は好ましくなく、また“persuasion”もあまり必要とされず、故にそれらを意図するRhetoricが強く求められることはない。

調和を尊ぶ同質村社会に加うるいま一つの理由は、Claiborne も指摘する仏教の影響であろう。

- (6) For Buddhists, therefore, wisdom and eloquence are to be found in silence as an original source of existence rather than in the verbalization of human conceptualizations. By stillness (as well as by action) one discovers knowledges. That which is exposed publicly, as human discourse, for example, depicts only partial information, by the Buddhists. (p.62)

少なくとも現在の日本が仏教国といえるかどうかは、異論があるかもしれない。「葬式仏教」といわれてかなり久しいが、それでも昔も今も仏教的思想に濃く影響を受けており、仏教的価値観のもとに暮らしているのは否定しようがない。その仏教では言語を媒介とせず理解することをむしろ理想とするという。言語を媒介にして、論理と概念化によって真理に近付こうとする西欧とは全く異質な世界がそこに展開される。“By stillness one discovers knowledges.”だからである。「考える」よりも「感じる」世界といえよう。この価値観の中では、対立する相手に言語を武器に持って向かい合い、説得することは必要性の高いものではない。

さらにClaiborne は、これまた西欧と全く異質な個の捉え方もやはり、仏教の影響であると指摘する。少し長くなるが下記に引用する。

(7) For the Japanese, Buddhists philosophy is integral to conventional knowledge of role and social responsibility. Their psychological identification with others as a unit — family, neighbors, schoolmates, colleagues — fosters a sense of self whose role in relation to the rest of society is much different from that of the more ego-oriented Westerners, whose solitary status depends upon their (rhetorical) ability to create for themselves a social role. Scarcely realizing themselves as subjects acting in opposition to others as objects, the Japanese manifest a basic tenet of Buddhism: non-belief in the dualistic nature of reality, by which the distinction between self and others is dissolved, or rather, exposed as illusory. Furthermore, realizing less the need to assert or defend personally-held opinions, beliefs, or creeds than contribute to the harmony of whichever group they might represent at any given time, the Japanese exhibit their usual contextual reasoning, a type of reasoning typified by subtlety and ambiguity rather than by the bold, clear assertions common to Westerners' logical reasoning. In this the Japanese exhibit another basic tenet of Buddhism: devaluation of the intellectual processes in general and of language in particular; reality is experiential for the Buddhist. (pp. 64-65)

仏教の基本的理念の一つである“non - belief in the dualistic nature of reality”においては、自と他の対立は存在しないことになり、そうであるならば、仏教国日本の中で欧米のような対立する他者に対して説得する意図をもつ言語使用が発達することはない。

同質村社会と仏教が因なのか、それとも仏教がそのほとんどの因なのかはともかく、日本社会は、個人と他者は調和すべき関係であり、また言語に重きが置かれない風土であることは間違いない。それに比して、個人と個人は本来対立する存在であり、それゆえに言語を駆使して相手を説得する必要があると考えるのが欧米の風土である。そしてそれぞれの風土に即して、つまりそれぞれの必要性に応じて発達したのが「レトリック」とRhetoricなのである。言語でもって理性的に訴え、ある時には強引なまでに相手を説得することが求められない、それどころかむしろそれが歓迎されない日本社会において、説得に必要な言語運用術が発達することはなかった。個と個の対立を前提とした、説得するかさもなくば説得されるかの戦いのRhetoricではなく、融和する個と個の理解を促す「レトリック」が発達したのである。

2. 理由提示型の文章 —— Explanation と Argument

本節では、“consensus”を得るための日本語「レトリック」と“persuasion”を意図する英語のRhetoricの違いが具体的にどのような違いとなって現れるのかを考察してみるが、まずその前に筆者が別稿（1994a）で論じた、その違いの一つに関する箇所を下記に引用する。

- (8) ...the poor rhetoric in Japanese writing can be attributed to the cultural assumption: group unity comes first in the Japanese island society. This requires that native speakers of Japanese should not express their opinions in an assertive way. Harmony must be kept at the expense of pursuing or winning an argument. They do not adopt a particular stance and are reluctant to make firm assertions. This reluctance results in a distinctive tendency: the writer first says something and then modifies it, by limiting it or adding another point of view. It serves as another important strategy for the Japanese way of persuasion, and closely connected with this is

mottomo.... With this word there emerges a thought pattern of stepping forward and then turning around, which native English speakers think makes the logical force less than convincing and leaves something to be desired. However, this is certainly one aspect of a Japanese cultural tendency that strikingly contrasts with the behaviour of English speakers.

(p. 608)

日本社会にあっては、主張を強く前面に押し出し、結果として相手を説得することに成功するよりも、それ以上に調和を乱さないことの方が評価されるのである。平たく言えば、角がたたない様にする事の方が重要となる。断定的なものの言い方は一般に好まれないし、そのような言い方は避ける傾向にある。こうした日本語独特の文章展開に欠かせぬものに接続詞モットモがある。接続詞の分類では「補足」に属するモットモは、森田(1980)によれば、「前文で述べた事柄に対して、それを否定するような場合・条件・事実などがあることを後の文で付け加え、だから前文で述べた事柄は決定的なものではないとする」(p. 266)ときに用いられる。先行する内容を一部翻すような内容を後続に導くモットモは、一歩進んでは半歩戻る日本語独特の談話構造を形成することになる。半歩戻るだけに論理は弱くなるが、説得が第一目標ではない「レトリック」においてそれが支障となることはない。前文で述べられた事柄に新たな側面を次々に付加して先へ、先へと進む英語的な展開と大きく異なるというだけである。

「レトリック」とRhetoricの違いの二つ目の具体例として考えられるのは、そしてこれが本節以降の主要考察対象となるが、理由の提示の在り方である。「レトリック」とRhetoricの違いは一言でいえば、説得の意図の有無である。そうであるからには、主張を裏付ける理由の提示の在り方が問題となってくるし、また違う筈である。

ところで文章には、Reasoning と呼ばれる文章とそうでない文章がある。Reasoning とは、S.N.Thomas(1973)の定義によれば、“any discourse in which some statement is given as a reason for some conclusion”(p. 12) である。すなわち、ある結論に対しその根拠・理由が提示してある文章となる。このような文章も実はさらに二種類に下位分類される。つまりArgumentとExplanation の二種類であり、両者がいつも截然とわかれるという訳ではないが、本来異なる意図をもつものである。異なる意図とは、T.Govier(1992)の表現を借りれば、“Arguments offer justifications; explanations offer

understanding.” (p. 16)となる。またS.N.Thomas(1986)は、Argumentは“to justify”するものであり、それに対してExplanationは“to explain”するものと述べるが、“to justify” “to explain”のそれぞれについて次の様に説明する。

- (9) To justify a claim or assertion is to give grounds, evidence, or reason of any other sort designed to convince others (or persuade ourselves) of its truth. To explain a state of affairs or an occurrence is to make clear or tell why it exists or happened. (p. 13)

S.N.ThomasやT.Govierの説明から明らかなのは、Argumentが、相手を納得・説得させるべく、そのために根拠を添えて或る主張を提示するものであるのに対し、Explanationは或る状況がどうして生じたのかその事情を添えて説明するものであり、それは説得を意図したものではなく、相手に状況が一層分かりやすいように、つまり理解を促すべく理由を述べるものである。下記に引用するS.N.Thomasの例文は、両者の違いを明確にする上で役立つものであろう。

- (10) a. Democracy is the best form of government because it involves majority rule and gives everyone a voice in decisions.
b. The mixture exploded because it became too hot. (p.13)

(10a)がArgumentの例であり、(10b)がExplanationの例である。(10a)において話者は、民主主義が最良の政治形態であると主張するが、なぜ最良の政治形態と自分は考えるのか、その理由をbecause節にて付加する。相手を納得させ自分と同じ意見に同調させるべくその根拠を提示しているのである。一方(10b)は、その混合物が爆発した事実に言及するが、なぜ爆発したのか、その理由が同じbecause節にて付加されている。しかしながら、理由といっても(10b)のbecause節は、爆発を生じさせた状況・背景を説明するbecauseであり、話者の主張の根拠となるbecauseではない。理由・根拠を導入するのに用いられる接続詞、しかも上記の例文では同じbecauseが使われているにも拘らず、二つのbecauseは機能が全く異なるのである。(10a)のbecause節は“to justify”であるが、(10b)のbecause節は“to explain”である。“persuasion”の機能をもつのは言

うまでもなく前者である。

ArgumentとExplanationに下位分類される、いわゆる Reasoningの範疇に属する文章において、理由提示はbecauseに代表されるIndicatorがいつも用いられるとは限らないが、ただIndicatorの存在は、文章が少なくともReasoningタイプであるかどうかを簡単に見極めさせてくれる。becauseと同種のものとして、英語には次の様なIndicatorがある。A.Fisher(1988)の挙げた代表例である。

Reason indicators

because...	the reason being...
for...	firstly,...secondly,...(etc.)
since...	may be inferred from the fact...
follows from the fact...	(p. 17)

これらの中でもよく用いられるbecause, for, sinceの接続表現は日本語にも相当するものがあり、それはトイウノハとナゼナラである。英語のbecause, for, sinceがそうであるように、日本語のトイウノハ・ナゼナラもすべて、ArgumentにもExplanationにも使われうる。そのことが日本語文章においてもやはりArgumentなのかExplanationなのか判断を難しくさせることがある。英語・日本語を問わず、例文(10a,b)の様にいつも明確に截然と下位分類されるわけではない。

文章の種類の中でもReasoningの範疇に属すのか、またそのReasoningの中でもArgumentとExplanationのいずれなのか、Indicatorが用いられていない文章も多く、仮に用いられても同じIndicatorが使われるため判断が難しいことがあるが、ここで一つの予測をたててみたい。それは、英語文章に比して、日本語文章はArgumentタイプが決して多くはないであろうということである。というのは、前節において、日本語「レトリック」は英語のRhetoricと違い“consensus”を得ることを意図するものであり、“persuasion”を目論むものではないと論じてきた。勿論これは程度の問題であり、日本語は決して西欧的な意味での説得を意図することが全くないという意味ではない。英語も日本語もすべての文章がReasoningであるとは限らないように、それぞれの言語に様々な種類の文章がある。ただ、それでも言語によって或る傾向・特色がみられるのではないか、ということである。そして理由・根拠を導入する接続表現を伴う、明らかにReasoning

の範疇に属する日本語文章に限定して検証した場合、Argumentは決して多くなく、むしろExplanationが多いのではないかということである。具体的にいえば、英語のbecause/for/asに対応する、同じく理由・根拠を導く接続語句トイウノハ・ナゼナラが、“to justify”、つまり話者の主張を正当化するためによりはむしろ、“to explain”、即ち聴者の理解を促す説明のために用いられることが多いであろうということの意味する。Argumentが“persuasion”を、そしてExplanationが“understanding”の意図をそれぞれ持つものであるからには、日本語「レトリック」の世界においてArgumentが多いとは考えられない。この予測が正しいかどうかをみるために、次節では、トイウノハ・ナゼナラが用いられている実例を検討してみたい。

3.1. トイウノハとナゼナラ（バ）

市川孝(1979)は、文の接続関係を順接型・逆接型・添加型・対比型・同列型・補足型・連鎖型（接続表現は普通用いられない）・転換型の八類型に分類するが、トイウノハもナゼナラも共に補足型に属し、根拠づけをするものである。これらトイウノハとナゼナラが実際の文献にどの程度の頻度で用いられているかをまとめたものが下記の表である。なお、トイウノハと同類と思われるトイウノモ、ソレトイウノモ、ソレトイウノハ、またナゼナラと同類のナゼナラバ、ナゼカトイウトも資料に含めるものとする。

（表1）

『メニューの余白』		『退屈な午後』		『日米同時破産』	
種 類	数	種 類	数	種 類	数
ナゼナラバ	1 例	ナゼナラ	4 例	ナゼナラバ	5 例

『タテ社会の人間関係』		『日本とは何か』	
種 類	数	種 類	数
ナゼナラバ	6 例	ナゼナラ ソレトイウノモ	1 例 4 例

『メニューの余白』と『退屈な午後』はいずれも作者が自らの情緒的な思いを自由に、いわば思いつくままに書き連ねたエッセイ集である。ナゼナラやトイウノハの様な、根拠・理由を提示する「論理的な」接続詞が少ないのも当然であろう。しかしながら、『日米同時破産』『タテ社会の人間関係』『日本とは何か』の三冊は、題からその内容が容易に想像できる様に、一つのトピックについて一冊すべてを要して論じた書物であり、結論を強化する理由の必要性からも高い頻度が予想されたが、著者は三人ともあまり用いていない。日本語文章では、この種の接続詞が決して多くはないことが、上記の表から明らかとなった。ちなみに、『タテ社会の人間関係』に使われた接続語句の数は、林田(1992)で検証したように、先の市川の類型別にまとめると、同列24例、添加24例、順接11例、逆接5例、対比5例、転換2例、そしてナゼナラバを含む捕足7例である。どのタイプの接続語句がもっとも多いかは、内容・文体により異なり一概にはいえないが、一般に添加・逆接・同列のクラスが多い傾向にある。

ところで、ナゼナラ・トイウノハの類が頻度高く用いられることがあまりないのは、木下是雄(1989)も指摘することであるが、日本人一般にみられる理由先行の言語習慣によるものであろう。

- (11) 日本人は、まず理由を述べてから発言の主題 —— 話のポイント —— にはいる
（「あぶないですから白線の内側へ下がってお待ちください」）。欧米人はまずポイントになることを言うてから理由を述べる。これは、日本文では文全体の述語が最後に来るので
.....だから.....する（してください）
というように理由を述べる従節が主節に先立つのに対して、欧米語では
.....する（してください）、なぜかという[because]....
というように主節が先行することに対応しているからであろう。(p.88)

日本語の構文に原因があるかどうかは本稿の範囲を超えるものであり、ここで追及するのは控えるが、理由から結論へとすすむ傾向にあるのは内省してもよく分かる事実である。結論から理由にすすむ場合に用いられるナゼナラやトイウノハが決して頻度が高くないからといって即、日本語文章にReasoning,それもArgumentの文章が少ない、と結論を下すことはできない。ナゼナラやトイウノハのIndicator を用いないReasoning はいくら

でも可能だからである。ただ本稿では、あくまでこれらのIndicator があらわれた、明らかに結論先行型Reasoning と思われる例文に限定して考察をすすめることにする。理由を導入する対応語として簡単に片付けられている英語のbecause/for/asと日本語のナゼナラ・トイウノハが、それぞれの言語の特徴を反映した使われ方をしていることを検証したいからである。これらのIndicator の有無に関係なく、ひろく日本語文章全体においてのReasoning タイプの多さ少なさ、またArgumentとExplanation の下位区分の分布状態については今後の研究課題とする。

一般的には決して多く用いられるとはいえないナゼナラ・トイウノハであるが、極めて用例の多い書物が二冊ある。土居健郎著『「甘え」の構造』、そしてR.Whiting 著、玉木正之訳『和をもって日本となす』の二冊である。下記の表を参照されたい。

(表2)

『「甘え」の構造』		『和をもって日本となす』	
種 類	数	種 類	数
ナゼナラ	2 0 例	ナゼナラ	1 例
ナゼナラバ	1 例	ナゼカトイウト	1 例
トイウノハ	4 6 例	トイウノハ	5 1 例
ソレトイウノハ	3 例	トイウノモ	5 例
ソレトイウノモ	2 例		

文章には個人的傾向・癖があるとはいえ、これら二冊には理由を示す接続詞の多さが目立ち、しかもトイウノハの頻用が際立つ。本稿の検証に格好の材料を提供してくれるものである。

市川の分類では、ナゼナラもトイウノハも同じ補足型で、しかも根拠づけであるとしかわからないが、森田良行(1980)の説明は両者に違いがあることを示唆している。森田によればナゼナラ(バ)は、「“そのわけは”の意で、あとから理由説明を行うときに使」い、「抽象的な事柄や意見、未定の事実について取り上げる場合が多い」(p.271)。それに対し、トイウノハは、「すでに成立している事柄に対して、その成立の根拠を明かすとき用いる。後件の説明部分は既定の事実である場合が多い」(p.271)。森田の例文を下記に引用する。

- (12) a 授業料の値上げ案を見送ることはできない。なぜならば学校経営は大幅に赤字だから。
- b 二つの三角形は合同のはずだ。なぜならば三辺がそれぞれ等しいから。
- (13) a 私はわざと欠席したんです。というのは、欠席することが一つの抵抗だと思ったからです。
- b 父は彼を信用していませんでした。というのは、今までに何度も父はあの人にだまされていますから。

(12) のナゼナラバと (13) のトイウノハを較べてみると、明らかに用法に違いがあるのが分かる。(12) の場合、「見送ることはできない」「合同のはずだ」と主張する話者は、そのような発話内容が何を拠り所に可能であるのかをナゼナラバの後続文によって説明している。一方(13)のトイウノハは、どのような理由により「欠席したんです」「信用していませんでした」の発話がなされたかではなく、「欠席」「不信」そのものを生じさせた状況の説明である。(12)のナゼナラが(10a)のbecauseに、そして(13)のトイウノハが(10b)のbecauseに対応する用法といえよう。

上記の4例をみる限りにおいて、ナゼナラは「説得」の意味合いを含むArgumentに用いられる傾向にあり、トイウノハはその含みがないExplanationに用いられるという印象を持つ。しかしながらナゼナラに関しては、実際の文献ではどちらにも使われうる。次の例文を考察されたい(引用例文中の下線は筆者によるものである)。

- (14) a 考えようによっては、金で入れる大学のほうが、頭のよさで入れる大学より公平かもしれない。
- なぜなら、金は努力や運次第で貯めることもできるが、頭の悪いのは、努力や運ぐらいでは変えられない。(『退屈な午後』)
- b 学歴で一律に個人の能力を判定するということは、能力主義というよりも反対に能力平等主義である。なぜならば、学歴で能力が違ふということは、誰でも在学した一定年数分だけ能力をもつということになるから、個人の能力差を無視した考えである。(『タテ社会の人間関係』)
- c かつての松方幸次郎、大原孫三郎、石橋正二郎といった、審美眼と財力を合わせ持った実力者の存在が許されなくなっている。

なぜならば、現代の企業は民主主義の上に成り立っており、株主総会や取締役会の議決によって物事が進行し、個人プレーは極力、抑えられる仕組みになっている。ところが、絵画・芸術、また味覚の世界は、まったく個人的な審美眼と感覚・嗜好の領域なのだ。（『メニューの余白』）

- d しかし全部手持ちのドルを売ったとしても、翌月にはまた輸出代金としてドルが入ってくる。

なぜならば我が国からの輸出が多く、輸入が少なく、結果として膨大な貿易の黒字が続いているからである。（『日米同時破産』）

「金で入れる大学の方が公平かもしれない」の(14a)は、この逆説を“to justify”すべく、ナゼナラを伴って「金は努力や運次第で貯めることもできる」と続ける。(14b)では、「学歴での判定は実は能力平等主義である」と主張する中根千枝は、その主張を根拠づけるために「なぜならば、在学した一定年数分だけ能力があるとみなすのは、個人の能力差を無視した考えである」と述べる。ナゼナラ(バ)はいずれも“to justify”の用法であり、a,bともにArgumentの文である。一方(14c)は、「実力者の存在が許されなくなっている」背景は「個人プレーは抑えられる仕組みになっている」からであると、その事情がナゼナラバを伴って説明される。(14d)でも同じくナゼナラバは、「全部手持ちのドルを売っても翌月入ってくる」のは「膨大な貿易黒字が続いているからである」とその事情を提示する。c,dのナゼナラバは、“to explain”の用法であり、この二文はExplanationの文となる。

少なくともナゼナラ(バ)はbecause等と同様、ArgumentにもExplanationにも等しく用いられるが、それに対して、トイウノハは圧倒的にExplanationにあらわれると予測される。トイウノハの定義、「すでに成立している事柄に対して、その成立の根拠を明かすとき用いる」の定義そのものが“to explain”の日本語解釈に相当する。先に引用したS.N.Thomasの“to explain”についての説明を再び記せば、“To explain a state of affairs or an occurrence is to make clear or tell why it exists or happened.”である。

3.2. 原文と訳文の比較観察

次表は、土居健郎著『「甘え」の構造』にあらわれたナゼナラ及びトイウノハの類が英

訳書(*The Anatomy of Dependence*)ではどのように訳されているかをまとめたものである。

(表3)

ナゼナラ	トイウノハ
since 1 1 例	since 1 6 例
for 3 例	for 3 例
*** 2 例	because 1 例
構文異なる 1 例	in short 2 例
	in other words 1 例
ナゼナラバ	*** 1 9 例
	構文異なる 1 例
for 1 例	ソレトイウノハ
	for 1 例
	*** 1 例
	構文異なる 1 例
	ソレトイウノモ
	because 2 例

注 原本にある「刊行二十周年に際して」と「刊行十周年を迎えて」の箇所は英訳されていないため、同箇所にあられたナゼナラおよびトイウノハは対象外とする。

注 「構文異なる」は、原文と訳文の構文が違い過ぎ、接続詞の比較が難しい例である。

注 ***の記号は、原文と訳文の構文が類似しているにも拘わらず、英訳では接続表現が用いられていない例である。

「構文異なる」を対象外として上記の表を検証して明らかなのは、ナゼナラ(バ) 17 例の内 15 例が since, for 等の理由をあらわす接続語句に訳されている。一方トイウノハの類では、since, for, because 等に訳されたのは 46 例中 23 例(50%)、対応接続語句がないのが 20 例(43.5%)、そして言い換えに相当する in short, in other words が 3 例である。

『和をもって日本となす』は、『「甘え」の構造』とは逆に原本 (*You Gotta Have Wa*) は英語であるが、日本語訳本においてトイウノハが多く用いられているケースであり、英日の対応のありかたを次表にまとめた。

(表 4)

ナゼナラ	トイウノハ
*** 1 例	because 1 9 例 since 1 例 as 1 例 *** 1 5 例 構文異なる 1 2 例 相当する原文無く比較困難 6 例
	トイウノモ
	*** 2 例

注 ***の記号は、(表 3) は逆に、英語原文ではナゼナラ・トイウノハ等に対応する接続表現が用いられていない例である。

(表 3) と同様に「構文異なる」「相当する原文無く比較困難」を対象外とすると、原文に理由をあらわす接続語句がないのに挿入されたトイウノハの類が 3 8 例中 1 7 例 (44.7%) を数え、because, since, as 等の訳語としてのトイウノハは 2 1 例 (55.3%) となる。(表 3) は日本語原文と英語訳本の比較であり、(表 4) は英語原文と日本語訳本における理由をあらわす接続語句の使い方の比較観察であるが、両者に共通するのは、トイウノハの類における「***」の多さである。それではどのような例文において「***」となっているかを次に詳しく検討してみたい。

3.3. トイウノハの例文検証

(表 3) をみると『「甘え」の構造』には、トイウノハが in short と in other words に訳された例が計 3 例あった。1 例ずつ下記に引用する (以下引用例文中の下線及び〔 〕はいずれも筆者によるものである。なお英語引用例文中の〔 〕は、対応接続語句が予

測される位置を示す)。

- (15) a しかし最近は、西洋人のこの信仰も漸く形骸化してきたと見られる節が存する。

というのは現代の西洋人は、自由が空虚なスローガンに過ぎなかったのではないかという反省に漸く悩みはじめているからである。 (『「甘え」の構造』)

- b But there are signs that that faith has recently begun to deteriorate into an empty shell.

In short, modern Western man is gradually being troubled by the suspicion that freedom may have been only an empty slogan.

(*The Anatomy of Dependence*)

- (16) a もちろん同じ原則といっても、人が違えば気が合わないということが起こるが、

しかしまさに気が合わないという事実の中に、それぞれの気が求めているものは同じであることが暗示されている。というのはいずれの気も本来己に合うものを求めているからで、それ故に気が合わないということが不快なこととして意識されるのである。 (『「甘え」の構造』)

- b Of course, this “same principle” does not mean that different people necessarily get along well because it may happen that their *ki* do not match. But the very emphasis on the discrepancy in their *ki* suggests that the thing that the *ki* of each is seeking after is the same. In other words, both are, essentially, looking for something that fits in with the self, for which reason, a failure of the two *ki* to match is experienced as something unpleasant. (*The Anatomy of Dependence*)

この2例のトイウノハは、英訳で用いられた接続語句が示す様に、言い換えの機能を持つといえよう。(15a)では「西洋人の信仰の形骸化が見られる節」を「自由が空虚なスローガンに過ぎなかったのではないかという反省に悩みはじめている」に、そして(16a)では「気が合わないのは気が求めているものが同じであることの暗示」を「いずれの気も己に合うものを求めている、それ故に気が合わないということが不快なこととして意識される」に、それぞれ説明しなおしているにすぎない。理由・根拠の提示のトイウノハというよりは、言い換え若しくはより具体的に説明するトイウノハの用法は、下記の例文、いず

れも英訳では対応接続語句が全く用いられていない例文において、もっとはっきりするであらう。

(17) a ところで「死んで神になる」また「死んで仏になる」という民衆の思想が甘えの心理に関係があることに、私は自分の個人的体験から思い至った。というのは私の両親が相ついで世を去った後、それまでは私の親であるという面を通してしか彼らの存在を意識することができなかったのに、死によって繋りが絶たれたことにより、初めて彼らが私にとっても一個の独立した人格として意識されるようになったからである。（『「甘え」の構造』）

b Now, the connection between popular ideas of “dying and becoming a god” or “dying and becoming a Buddha” and the *amae* psychology was first brought home to me through my own personal experience. [] Following the death in rapid succession of both my parents and the consequent severing of my bonds with them, I became aware of them for the first time as independent *persons*, when hitherto their existence was real to me only insofar as they were my own parents. (*The Anatomy of Dependence*)

(18) a この現代の活動的青年と母親のひそかな結びつきは、実は十年前の安保闘争の活動家たちについてすでに確かめられていたことであった。というのは、当時エール大学のロバート・リフトン教授が日本に来ていて活動家の何人かと面接し、私は彼と一緒にその録音を聞いたのであるが、それは彼らがいずれも母親との親密な関係にあることを示唆していたのである。（『「甘え」の構造』）

b This private tie between activist youth and the mother had in fact already been demonstrated ten years previously in the case of the students active in the struggle against revision of the U.S. - Japanese Security Treaty. [] Professor Robert Lifton of Yale University was in Japan at the time; he had interviews with a number of these activists and I listened to the tapes with him. They all suggested a very close connection between those interviewed and their mothers. (*The Anatomy of Dependence*)

- (19) a ところで比較的最近になって、フロイドの同一化 (identification) の概念が実は全く「甘え」に該当することを悟った次第である。というのは私は永らくこの二つがそれこそ同一であることには気が付かなかった。(『「甘え」の構造』)
- b Comparatively recently, however, it dawned on me that Freud's concept of identification does in fact correspond to *amae*. [] For a long time, I failed to realize that these two things were one and the same ,....
- (*The Anatomy of Dependence*)

(17a)の先行文、「民衆の思想が甘えの心理に関係があることに個人的体験から思い至った」のみではどうということか理解が十分に伝わらないが、トイウノハに導かれる後続文で「両親が世を去り、死によって繋がり絶たれたことにより、初めて彼らが一個の独立した人格として意識されるようになった」と説明し直す。(18a)では、「結びつきはすでに確かめられていたこと」がどのようなことなのかこれだけでは分からないが、「リフトン教授と活動家の面接の録音が示唆していたこと」であることが、トイウノハに導入される後行文で明らかとなる。また(19a)は、「比較的最近悟った」のは「永らく気が付かなかった」ためであると説明する。

先にトイウノハ（そしてナゼナラも）は「補足型」とであると述べたが、理由・根拠の提示というよりは、先行文の理解をより一層確実にするために言い換えたり説明を加えたり、いずれにせよ「補う」機能をもつといえる。in short, in other wordsに訳された(15) - (16)、また英語対応接続語句が訳されていない(17) - (19)はすべて、話者が聴者を説得すべく理由・根拠を提示するためのトイウノハではなく、聴者の理解を促進するためのトイウノハである。そしてこの用法のトイウノハは、in short等に訳されたものと対応接続語句が用いられなかったものを合わせると（表3）では50%に達する。もはや根拠づけのトイウノハと言い切ることはできない。

次の(20) - (23)は上記の例文とは逆に、英語原文では接続語句が用いられていないにも拘わらず、日本語訳文において相当箇所トイウノハが挿入されている例である。

- (20) a Nineteen eighty-four turned out to be the blackest, most traumatic season Americans and Japanese ever inflicted on each other.
- [] That year, three *gaijin* unceremoniously walked out on their

teams and their fat contracts in midseason. (*You Gotta Have Wa*)

- b 1984年は、アメリカ人も日本人も精神的に傷つき、それまでに経験したことのないような、憂鬱なシーズンになってしまった。というのは、3人もの〈ガイジン〉が、すばらしい契約条件を破棄して、シーズン途中で勝手にアメリカに帰ってしまったのだ。（『和をもって日本となす』）
- (21) a There have been compensations, however. [] Scouts from the mighty Tokyo Giants came around to recruit the 1987 ace but the boy said he was not interested in turning pro. (*You Gotta Have Wa*)
- b ただ、そのようなむなしさを少しばかり埋め合わせしてくれるような出来事があった。というのは、あの東京ジャイアンツが、この洛星のエースをスカウトしにやって来たのだ。が、その少年はプロにまったく興味がないと、監督を介して返答した。（『和をもって日本となす』）
- (22) a He felt a chill down his spine. He didn't even want to think about that possibility. [] In Japan, it was said that once you had surgery on your pitching arm, you were finished. Sports medicine had not yet developed into the specialty field that it was in other countries. (*You Gotta Have Wa*)
- b おそらく彼は、背筋がぞっとするようなおぞましさを感じ、その手術の可能性などまるで考えようとしなかったに違いない。というのは、当時の日本では、他のスポーツ先進諸国が専門分野として確立しているようなスポーツ医学が発達しておらず、ピッチングをする利き腕にメスを入れることなど、選手生命の終わりを意味することにほかならない、という考え方が一般的だったのだ。（『和をもって日本となす』）
- (23) a Few complain. [] To these players, baseball represents a way of circumventing Japan's infamous "examination hell" education system.... (*You Gotta Have Wa*)
- b しかし、このシステムに文句をいう者はほとんどいない。というのは、選手にとって野球部に籍を置くことが、日本の悪名高き“受験地獄”から逃れるためのひとつの手段になっているからだ。（『和をもって日本となす』）

各文を検討すると、まず(20a)は、先行文にある“the blackest, most traumatic season”がどのようなシーズンであったかを、段落の変わる次の文で説明する。当然ながら原文にはbecauseの類の語句はみられないが、訳文ではトイウノハが挿入され、この語句に導かれた後行文が続くこととなる。同じく(21a)も、“compensations”を含む先行文とそれを具体的に解説する後続文からなる。やはり原文には理由を導入する接続語句は現れない。ところが訳文ではトイウノハと共に説明文が続く。次に(22a)では、“He didn’t even want to think about that possibility.”の背景、つまりなぜ彼はその可能性を考えようとさえしなかったのかを後行文にて説明する。また(23a)では、“Few complain.”の状況はどうして生じたのかをやはり後続文にて解説する。(20b)-(21b)は簡潔すぎる名詞表現を具体的に説明し直す例である。一方(22b)-(23b)は先行文の状況がどうして起きたのか、後行文がその事情を説明する例である。トイウノハの定義である「すでに成立している事柄に対して、その成立の根拠を明かすとき用いる。後件の説明部分は既定の事実である場合が多い」がそのまま当てはまるのが(22b)-(23b)である。

(15)-(23)の例におけるトイウノハは聴者の理解を促す“to explain”のトイウノハであり、この用法のときは英語のbecause, for, as, since等是对应しないことが明らかとなった。(表3)では50%、(表4)では44.7%を占めるが、それはまたそれらの文がArgumentではなくExplanationであることを教えてくれる。ではbecause, for, as等に対応している例文の場合はどうであろうか。下記の引用例文を参照されたい。

- (24) a このことは精神科医として当然なことと思われるかもしれないが、実は当然ではなかったのである。というのは従来日本の医者、患者の話を聞いてその要点を限られた数のドイツ語で記載することが習慣になっていたからである。

(『甘え』の構造)

- b This may seem an obvious thing for a psychiatrist thing to do, but in fact it was not so obvious, since it had traditionally been the practice for Japanese doctors to listen to their patients and take down essential points in a very restricted number of German words.

(*The Anatomy of Dependence*)

- (25) a 彼はさらに、現実にはわがままを通すことが不可能であるばかりではなく、内心にも深い傷みを覚える。というのは、彼にとって集団はもともと大きな心の支

えであり、集団から離反して孤立することはそれこそ全く自分をなくすことであり、それを堪えられないことと感ずるからである。（『「甘え」の構造』）

- b Not only is it impossible for him to get his way in practice, but his failure creates a deep hurt in his own mind, for the group for him is basically a vital spiritual prop, to be isolated from which would be, more than anything else, to lose his “self” completely in a way that would be intolerable to him. (*The Anatomy of Dependence*)
- (26) a 精神科医の使う術語は、一般に翻訳的なものが多く、日本語として熟していないために素人に分かりにくいものが多いが、この対人恐怖は唯一の例外であって、そのままだでも立派に日常語として通るであろう。それというのも、この言葉が造られた経緯が、もっぱら日本の患者の観察に基づいていたからであると思われる。（『「甘え」の構造』）
- b It is almost the only case of a specialist term used in psychiatry that does not smack of translation from some Western language; most other terms have still not settled in as items of Japanese vocabulary, and they are difficult for the layman to grasp. It is an exception, almost certainly, because it came into existence chiefly as a result of observation of Japanese patients. (*The Anatomy of Dependence*)
- (27) a When the Swallows’ regular third baseman, American Doug DeCinces, hit a dramatic ninth - inning *sayonara* home run to beat the Giants in a game in June that year, TV viewers did not see him cross home plate because all the cameras in the stadium were focused on young Mr. Nagashima, who was leaping for joy on the Swallows bench. (*You Gotta Have Wa*)
- b その年の6月、スワローズのレギュラー三塁手であるアメリカ人のダグ・デシンセイが、劇的なサヨナラ・ホームーでジャイアンツを倒したとき、テレビの視聴者は彼がホームインするシーンを見るができなかった。というのは、球場のカメラは、スワローズのベンチで大喜びして飛び跳ねていた若きミスター・ナガシマに焦点を合わせていたからだった——。（『和をもって日本となす』）

(28) a Blazer's stint with Nankai did not turn out to be a success either, as he found himself unable to make trades or otherwise add new personnel.
(*You Gotta Have Wa*)

b ブレイザーの仕事は、残念ながら南海でも実を結ばせることができなかった。
というのは、彼にはトレードの権限が与えられず、新しい選手を獲得するために手を打つこともできなかったのだ。(『和をもって日本となす』)

(29) a The story seemed to be true, since no one in Yomiuri refuted it.
(*You Gotta Have Wa*)

b この記事には信憑性があった。というのは、読売の関係者の誰ひとりとしてこの事故を否定しなかったのだ。(『和をもって日本となす』)

(24a) - (26a) のトイウノハ (ソレトイウノモも含む) はすべて “to explain” の用法であるが、英訳ではそれぞれ *since*, *for*, *because* が対応している。また日本語訳文に用いられた (27b) - (29b) のトイウノハも同じく “to explain” の用法となり、英語原文では各々 *because*, *as*, *since* に対応する。(24a) では、「このことは当然ではなかった」のは、「限られた数のドイツ語で記載することが習慣であった」ためであると説明する。(25a) でも、「彼は内心にも深い痛みを覚える」のは「集団からの離反を堪えられないと感ずる」ことであると、やはりひとつの状況を生じさせる事情の説明をする。そして (26a) においてもやはり、「対人恐怖が立派に日常語として通る」のは「この言葉が作られた経緯が、もっぱら日本の患者の観察に基づいていたからである」と事情を説明する。訳文の (27b) は、「テレビの視聴者はホームインするシーンを見ることができなかった」のは「球場のカメラが若きミスター・ナガシマに焦点を合わせていた」からだと述べる。(28b) では、「ブレイザーの仕事は実を結ばせることはできなかった」のは「トレードの権限が与えられなかった」という事情によると、説明が続く。(29b) の「この記事には信憑性があった」を説明し直したのが「読売の関係者の誰ひとり否定しなかった」である。ただ、この (29b) のトイウノハは “to justify” の用法という解釈も可能であろう。

これまで引用例文を検証した限りにおいて、トイウノハが *because* 等の理由を導入する接続語句に英訳された場合、英語訳文では対応接続語句が用いられなかった場合、そして英語原文では接続語句が使われていないにも拘わらずトイウノハが日本語訳文に挿入された場合、いずれのトイウノハも “to justify” ではなく、“to explain” の用法であった。

つまり、トイウノハはArgumentではなくExplanationのReason indicatorであることが判明したことになる。つまり、トイウノハは日本語に多く現れる「説明的」文を導入する接続表現なのである。これまで繰り返し述べてきた様に、日本語「レトリック」は“consensus”を意図するものであり、日本語文章における「説明」とはその“consensus”を容易にするための言語運用術の一つであるが、トイウノハもこの言語運用術にかなった接続表現なのである。それだけにトイウノハは文章を一層「日本語らしく」させる表現といえる。

4. まとめ

Kaplanが指摘する様に、やはり言語によって文章展開の構造は異なると思われる。文章展開の型を普通、レトリックというが、日本語文章における「レトリック」と英語におけるRhetoricはかなり性質を異にするものである。同質村社会や仏教の影響か、個と個は調和すべき存在と考える日本人はより一層の理解を促すべく「レトリック」を用いるが、それに対して対立しあう個と個の前提の上に立つ欧米人は、相手を説得して自分の意見に同調させるべくRhetoricを用いることになる。「レトリック」は“consensus”を、そしてRhetoricは“persuasion”を目論むものである。

この様に異なる「レトリック」とRhetoric, その違いは具体的には言語のどのような面に現れているのかを考察する必要があるが、本稿では理由提示型の文章に限定して考察を試みた。理由提示型の文章はReasoning というが、これはArgumentとExplanationに下位区分される。どちらも英語ではbecause/since/as/for等、また日本語ではトイウノハ・ナゼナラ等の理由・根拠を導入する接続語句を伴うことが多い。特に日本語原文に表れたトイウノハと英語訳文、また日本語訳文に使われたトイウノハと英語原文を比較観察した結果、トイウノハは、“to justify”の用法はほとんどなく、もっぱら“to explain”の用法であることが判明した。このことは、トイウノハを含む文章はArgumentではなくExplanationであることを意味する。

トイウノハの限られた資料からだけで結論を下すのは早計であり、今後もっと広くデータを集めなければならないが、しかしながら、同じReasoningタイプの文章でも、日本語文章は説得の意図を持つArgumentよりも、理解を促すExplanationの方が多いことを裏付ける一つの根拠をトイウノハが提供してくれることになろう。Rhetoricの“persuasion”ではなく、“consensus”を目論む「レトリック」から当然予測され、導きだされる結果でもある。

資料出典

(日本語原文)

- (1) 堺屋太一 『日本とは何か』
- (2) 重金敦之 『メニューの余白』
- (3) 中根千枝 『タテ社会の人間関係』
- (4) 水谷研治 『日米同時破産』
- (5) 渡辺淳一 『退屈な午後』

(原文・訳本ともに参照したもの)

- (6) 土居健郎 『「甘え」の構造』
Bester, John(Tr.) *The Anatomy of Dependence*
- (7) Whiting, Robert *You Gotta Have Wa*
玉木正之(訳) 『和をもって日本となす』

参考文献

- 林田弘美 (1992)「文間接続語句の日英対照研究」OTSUKA REVIEW 28号 pp. 43 - 56.
——— (1994b)「談話接続の日英語対照研究 —— 接続詞モットモの英訳のありかた —— 」『埼玉女子短期大学研究紀要』第5号 pp. 259 - 278.
- 市川 孝 (1979)「文の接続」山口仲美編『論集日本語研究 8 文章・文体』有精堂 pp. 79 - 87.
- 木下是雄 (1989)「異国人とのコミュニケーションのむずかしさ —— 自然科学者の立場から —— 」『日本語学』8巻9号 pp. 86 - 91.
- 森田良行 (1980)『基礎日本語2』 角川書店 pp. 271 - 272.
- 西光義弘 (1990)「繰り返しの日英対照談話構造」『ことばの饗宴 —— 笈壽雄教授還暦記念論集 —— 』くろしお出版 pp. 525 - 549.
- 佐藤恭子 (1990)「接続表現の日英表現」『ことばの饗宴 —— 笈壽雄教授還暦記念論集 —— 』くろしお出版 pp. 551 - 562.

- Claiborne, Gay D. 1994. Japanese and American rhetoric: A contrastive study. San Francisco: International Scholars Publications.
- Fisher, Alec. 1988. The logic of real arguments. Cambridge: Cambridge University Press.
- Govier, Trudy. 1992. A practical study of argument. Belmont, California: Wadsworth Publishing Company.
- Hayashida, Hiromi. 1994a. A contrastive study of Japanese and English prose organization: Discourse connectives. Synchronic and diachronic approaches to language: A festschrift for Toshio Nakao on the Occasion of his sixtieth birthday. 597-612. Tokyo: Liber Press.
- Hinds, John. 1976. Aspects of Japanese discourse structure. Tokyo: Kaitakusha.
- Kaplan, Robert B. 1966. Cultural thought patterns in inter - cultural education. Language Learning 16. 1 - 20.
- Nishimura, Yukiko. 1986. Prose - organizing strategies of Japanese college students: A contrastive analysis. Descriptive and Applied Linguistics 19. 207 - 218.
- Oi, Kyoko. 1986. Cross - cultural differences in rhetorical patterning: A study of Japanese and English. JACET Bulletin 17. 23 - 48.
- Oi, Kyoko & Taeko Sato. 1990. Cross - cultural rhetorical differences in letter writing: Refusal letter and application letter. JACET Bulletin 21. 117 - 136.
- Thomas, Stephen Naylor. 1986. Practical reasoning in natural language. Englewood Cliffs, New Jersey: Prentice - Hall.